

歌が多いので、宇治川集とあだ名された。二十一代集とは、八代集と十三代集との総称。八代集とは、八代の勅撰和歌集即ち古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集の8集の称。十三代集はその後の勅撰和歌集、即ち新勅撰集・続後撰集・続古今集・続拾遺集・新後撰集・玉葉集・続千載集・続後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新続古今集の13集の称である。

注(4) たちばなもりべ。江戸後期の国学者・歌人。本姓は飯田。池庵・椎本〔しいがもと〕と号した。古典万葉の解釈において、本居宣長に対して一家をなした。「俗語考」は、俗語・方言の研究書で、「橘守部全集」の第9～10巻に活字化されている。他に「稜威言別」〔いつのことわき〕・「湖月抄別記」〔助辞本義一覧〕などの著がある。嘉永2年〔1849〕69才で歿した。

資料 言海（大槻文彦）  
広辞苑（新村 出編）  
全国方言辞典（東条 操編）  
自伝的仙台弁（石川鈴子）  
仙台の方言（土井八枝）

## 83 いつ頃から「青葉山」と呼び始めたか

問 仙台の青葉山は、いつ頃から呼び始めたのでしょうか。「仙台地名考」でも、これについては『いつ頃から呼ばれたかは詳かでない』とだけしか書いていません。

答 現在、青葉山と呼ばれるのは、天守台を中心とした高地一帯の汎称として、一般に通用しています。また、その大半の地が字名荒巻青葉<sup>(1)</sup>となっています。その確実な起原はいつか、無論仙台開府以前に見出すことはできませんが、「仙台地名考」の通り詳かではありません。ここは、慶長5年〔1600〕12月25日、伊達政宗による築城縄張り始めの時点を境に、実に歴史的変貌を遂げることになります。それと同時に、その真下に広がる無人の湿地原野が、4万を超える人口密集の城下町に一変するという驚異的開発によって、この山は、一挙に人間生活の息吹きの枠内に組み込まれて行くのです。そのことが、この山の呼び方に変動を及ぼしていないかどうか、この時期の前後の史料の検討が最も重視されるべきポイントであります。中世に遡ると、北朝側の奥州探題吉良貞家の古文書の残存したのがあります。その中で、観応2年〔北朝年号。1351〕2月の日付の

ある2通に「虚空蔵城」並びに「虚空蔵橋」の称呼が見られます。それは、虚空蔵堂が存在していたことによって、そのように称せられていたところ、即ち後世の仙台北本丸敷地に当たります。その後、歴史的暗黒の長夜を経て、近世の幕明けとともに、虚空蔵堂と同所にあった千体仏とは経が峯<sup>(4)</sup>の地に移され、「虚空蔵」に因む中世の呼び名は完全に消滅してしまいます。次に、その失われた呼び名に代るべきものを探索すると、かなりの年代を経た後の「正保二・三年〔1645～1646〕製作仙台北城絵図」に、本丸と二の丸敷地の中間あたりの西方、竜ノ口溪谷の対岸の山地に「青葉山」の名が初出します。仙台北城築城の時から170年も経過した安永8年〔1779〕の編著といわれる「残月台本荒荻」に次の記事があり、山の呼び名「青葉山」と同名の、寺の山号「青葉山」〔せいようざん〕<sup>(5)</sup>が出てきます。『残月亭の南脇御二ノ丸の間を青葉山寂光寺と言ふ、御本丸御移の節、右の寂光寺を北山に移し……』<sup>(6)</sup>。ここにおいて、青葉山寂光寺の山号から、現在も通用している「青葉山」の名称が<sup>(7)</sup>始めて生まれたことが推定されます。旧来の「越路山」が、慶長17年〔1612〕に愛宕神社が米沢→岩出山→仙台北元寺小路から移されここに鎮座して以来「愛宕山」と呼ばれ、また、「野手口山」や「茂が崎」が元禄10年〔1697〕大年寺建立以後「大年寺山」と称せられるようになったのと同様のあり方が考えられます。そこで、最も重要な問題点は、その青葉山寂光寺が何時からそこに存在したかということです。この寂光寺は、もと福島信夫郡信夫山中にあった寺で、当時信夫山の山名は青葉山〔あおばやま〕と呼ばれていたため、寺の山号「青葉山」〔せいようざん〕はその山名に由来したものであったとされています。ちなみに、信夫山の中峯は、今もなお「青葉山」と呼ばれています。この寂光寺が、慶長7年〔1602〕に仙台北に移されたことが「封内風土記」巻之2（田辺希文）に次の通り記されています。『在城北。真言宗。京都仁和寺末寺。伝云信夫郡福島一里東北。羽黒権現別当。而慈覚大師開基也。後陽成帝。慶長五年十月。同郡宮代之役。現住僧名不伝。及中興祖慶印上人与上杉將諸戦而有功。是以慶長七年。護持権現神体。到仙台北。賜地住移焉。有中興開祖慶印上人之墓。今日之行人塚』。すなわち、青葉山寂光寺は信夫郡の青葉山から、慶長7年仙台北城本丸傍に移され、その存在に因って「青葉山」の地名が発生することになるのであると考えられます。もとより正式命名というスタートの仕方ではなく、寺の山号→所在地の呼び名→周辺の呼び名として自然的に発生し、士民一般の共用性が高まり、次第に定着したものです。そのような成立であるので、公式に使われることも稀だったため、史料への現われが遅く、また少ないのであります。しかし、文芸用語として調法がようになってきたのはまだしも、甚しいのに至っては、他所の青葉の山を詠んだ万葉集の『秋露者移行示有家里水鳥乃青羽乃山能色付見者』〔あきつゆはうつしありけりみつりのあをのはのやまのいろつくみれば〕<sup>(8)</sup>をまで引用して、仙台北の青葉山が古くから歌の名所であったという説まで出てきました。この説に対して「大日本地名辞書」第7巻（吉田東伍）は、次のように論駁しています。『……青葉山の名所は、佐久間氏、万葉の「水鳥の青羽の山」の詠を引かれしと雖、此には非ず。殊に元暦〔1184～1185〕大嘗会〔だいじょうえ〕の悠紀方〔ゆきかた〕の歌なる、青羽山は近江国なり。されば、清輔抄に、<sup>(9)</sup>  
<sup>(10)</sup>

青葉山を陸奥とせるも、若狭の誤りのみ。仙台なる青葉山は、断じて古名所にあらず。千載集の「常葉なる青葉の山も秋来れば色こそかへねさひしかりけり」（僧正覚忠）にも附会し難からん。『萬葉集』〔759年までの作歌〕や『千載集』〔1187年詠進〕の歌と時代的に接合しない仙台青葉山とを結びつけたり、「青葉山」は雅名であるとしたりするお国自慢的発想は、いたずらに心情的に過ぎて問題とするに値しません。

要するに、慶長7年の青葉山寂光寺の仙台移遷の年以前において、仙台の青葉山の地が「青葉山」と称せられたことを立証できる資料は全くありません。「青葉山」の呼び始めは、この時点以後ということになります。

注(1) 伊達政宗は、仙台城に天守閣を建てなかったが、その敷地は設定してあった。標高131.6mの三角点のある本丸敷地最高所で、そこを天守台と称する。

注(2) 和賀彦次郎義勝時代野田三郎兵衛尉盛綱合戦次第事

右盛綱去正月十六日任御教書旨、惣領被相催間、属彼手府中馳参、岩切城搦手〔からめて〕太田口令警固、同二月十二日目大仏〔南〕脇壁岸責上城門、切入畠山殿御陣於御前、庄七郎相戦〔頸〕取了、此等次第御所私候人大塚十郎大河内兵庫助同所令合戦見知者也、同十四日宮城郡虚空蔵城畠山上野二郎口留守但馬権守同三川権守宮城四郎兵衛尉楯籠〔たてこもる〕間、彼城馳向致合戦軍忠之処、上野二郎殿自害了、但馬権守三川権守宮城四郎兵衛尉被彼所生〔捕〕也、然早下賜御証判、為備〔未〕代亀鏡、恐々言上如件、

観応貳年二月 日

（証判） （吉良貞家）

「一見了 （花押）」

〔「鬼柳文書」（東北大学国史研究室所蔵）。「仙台市史」資料90〕

注(3) 和賀六郎次郎義光合戦次第事

右義光去正月十六日任御教書旨、惣領相催間、属彼手府中馳参、岩切城搦手太田口令警固、同二月十二日目大仏南脇責上城内、切入致合戦忠節了、次同月十四日宮城郡虚空蔵楯畠山上野二郎殿留守但馬権守同三河権守宮城四郎兵衛尉楯籠候間、彼城馳向致合戦軍忠之処、上野二郎殿自害了、次所被生補〔捕〕但馬権守三河権守宮城四郎兵衛尉也、然早下賜御証判、為備未〔未〕代亀鏡、恐々言上如件、

観応貳年二月 日

（証判） （吉良貞家）

「一見了 （花押）」

〔「鬼柳文書」（東北大学国史研究室所蔵）。「仙台市史」資料91〕

注(4) 瑞鳳殿など伊達家三代の霊廟等のあるところである。万海上人という聖徳一世に聞えた行者が、このほとりで修業をし、生涯大般若経を転読し、末期に及んでこれを地中に埋めた

ので、この山を般若<sup>〇</sup>經<sup>〇</sup>峯<sup>〇</sup>といった。經<sup>〇</sup>峯<sup>〇</sup>という略称はそれから出たものという。本丸築城の時、そこ〔虚空蔵橋〕にあった虚空蔵堂を千体仏とともに此処に移遷した。次いで万治2年〔1659〕忠宗廟感仙殿をここに造営するに当り、現在地愛宕山に移すまで約60年近くの間、虚空蔵堂の在ったところなので、ここを元虚空蔵ともいう。〔「封内風土記」(田辺稀文)巻之1に『虚空蔵堂。在名取郡根岸邑愛宕山。属府内。伝云。往古在城中。後陽成帝慶長初。貞山君。經宮城地時。移干經峯。後西帝。万治二年。造宮義山君靈廟時。再遷今地。』とある。「残月台本荒萩」「仙台名所聞書」「仙台萩」「仙台鹿の子」等の地誌類に、虚空蔵堂を、本丸築城時直ちに愛宕山に移祀したと記しているのは誤である〕。万海上人は、出羽の国谷地〔やち〕の出身であると伝えられる。そして慶長の末年〔1614〕の頃には、傑物である政宗は聖徳高い万海上人の生れかわりであるという伝説が生れていた。万海は片眼であったから、その生れかわりの政宗もまた隻眼だといわれるのである。政宗が死去する前月、寛永13年〔1636〕の4月、自ら經が峯に登って、死後はこの辺に葬よう指示した。その遺言により、ここに靈廟の普請を始めると、一つの石室が発堀され、錫杖袈裟〔しゃくじょうけさ〕の行人〔ぎょうにん〕の遺体が現われた。古老の言により、それは万海上人の墓であるといわれた。政宗が、その生れかわりだと伝えられる万海上人と同じ場所に葬られることになった因縁の不思議さに、領内の人々の英雄政宗に対する畏敬の念は一層強いものになったという。恐らく工事の際に、偶然にも何者か不明な行人の墓が掘り当てられて、既に成立していた生れかわり伝説を、強固に完成する材料となったのであるといわれる。政宗廟の瑞鳳殿と第2代忠宗廟の感仙殿とは、昭和6年12月国宝建造物の指定を受けていたが、昭和20年7月10日の空襲で、惜しくも灰燼に帰してしまった。昭和51年5月24日、瑞鳳殿及び拜殿が再建された。

注(5) 著者不明。安永8年〔1779〕頃成立の地誌。「仙台叢書」第1巻に収録。「岩手県史」第4巻に『……岩谷堂〔一門伊達氏、5千石〕の御預床頭〔足輕組頭の配下で足輕10人の長〕高橋義兼(吉郎左衛門、巖堂、文化十年〔1813〕歿)も江戸に出て井上金峨に学び、のち昌平黌に入り、養賢堂儒員として迎えられ、「残月台本荒萩」四巻、「農業小児示教弁」一巻を著している。』とあるが、仙台側では、「残月台本荒萩」は著者不明であるとしている。この書は「東奥老士夜話」「仙台名所聞書」「仙台鹿の子」「仙台萩」等と同時代、同系乃至同工異曲の書である。きわめて有用な郷土資料であるが、170年以上に遡って記述された部分に、史実に反するところもある。

注(6) 二の丸の西南部、今の東北大植物園の蒙古の碑の直上、真近な地点に建っていた茶室。また残月御茶屋と称した。政宗書の「残月亭」の3字を刻んだ板額をかけてあった。

注(7) 慶長7年〔1602。本丸がほぼ竣工〕福島から仙台城本丸傍に移された寂光寺〔羽黒堂も附随〕が北山に移された正確な時期は不明であるが、『御本丸御移の節』とは二の丸構

築を指したもので、その普請が開始された寛永15年〔1638〕を降るものでないことは、二の丸の殿舎布置の状態から断定できることである。このようなことについての文書記録がないので、時代的に直近の「正保二・三年〔1645・46〕製作仙台城絵図」に当たると、羽黒堂が北山の地に見えており、上記の寛永15年北山移遷説が資料的に補強されてくる。北山に移ってからでも羽黒堂の別当寺として幕末に至ったが、明治初年伊達家の外護を失って廃寺となり、十二軒丁弥勒院に合併された。羽黒社の方は羽黒神社として同寺境内に存続し、北山附近住民の鎮守として祀られている。

注(8) 「万世に伝わるべき集」また「万の言の葉の集」の意味でこの名があるという。現存最古の歌集。20巻。仁徳天皇時代から淳仁天皇の天平宝字3年〔759〕まで、4～5百年間の歌約4千5百首を採録。部立は相聞・挽歌・雑歌などであるが、1巻或は2巻で一纏りをなし、20巻を通じての分類はない。歌形は長歌・短歌・旋動歌〔せどうか〕を主とし、短歌が4千首以上を占める。主たる編者は大伴家持〔おおとものやかもち〕といわれる。歌は概して素朴な感情が率直に表現され、調子も高く雄渾で、わが国古典の最たるものである。歌の音をあらわすに漢字〔973字〕を借りて表記しているので、万葉仮名〔かりなの略。仮は借、名は字〕の名がこの集から出た。

注(9) 佐久間洞巖の「奥羽観蹟聞老志」〔おおうかんせきもんろうし〕の記事を指している。佐久間洞巖は仙台の儒者・画家。諱は義和、字は子巖、容軒・洞巖また太伯山人と号し、通称は丁徳。新田親重の二男として、承応2年〔1653〕6月7日仙台に生れた。伊達家の画員佐久間有徳の養子となり、駿河台狩野派の始祖狩野洞雲益信について画を学び、その画技大いに進んだので、洞雲がその偏名を与えて洞巖と号した。後に、晩学だったが遊佐木斎に入門し、儒家としても一家をなすに至った。元禄4年〔1691〕主君綱村の怒りに触れて放逐された。この間、貧窮をなめつつ「伊達便覧志」15巻〔「仙台叢書」第3巻に収録〕を著した。同6年、許されてからは学問に専念した。伊達綱村はその学才を認めて修史事業に参画させた。彼が68才の時、綱村が世を去ったので、それからは、学問研究と後進の指導に努めながら、書・画をも楽しみとした。新井白石・荻生徂徠らと親交深く、白石と問答往復した書簡76通を集録した「新佐手簡」2巻がある。元文元年〔1736〕2月11日歿、84才。仙台新坂通荘巖寺に葬る。著に「奥羽観蹟聞老志」「五十四郡考」「復讐記事」「塩釜松島図記」「名所郡志」「伊達便覧志」等がある。「奥羽観蹟聞老志」は、東北地方の文学的地誌で、享保4年〔1719〕完成したもので、「仙台叢書」別刊2冊本として活字化された。彼の学問は長子の義方と、末子の新井滄洲に伝えられ、画は養子の如琢を経て孫の立德（六所）に受けつがれ、幕末・明治に及んで晴嶽・鉄園等有名な画人を出した。

注(10) 大嘗祭・大嘗・おおなめまつり・おおにえまつり・おおむべまつり。天皇が即位の後、初

めて行う神嘗祭。その年の新穀を以て、自ら天照大神をはじめ天神・地祇を祀る大礼で、神事の最大のものでとされる。

注⑪ 悠紀に関する方。悠紀に関する物事。悠紀とは、大嘗会の時、新穀を奉るべき東方の国。中古から近江国があてられた。斎忌・由基とも書く。これに対するのが主基〔すき。悠紀に対して西方〕。

注⑫ 八代集の一。20巻。寿永2年〔1183〕後白河法皇の院宣によって文治3年〔1187〕藤原俊成撰。撰歌は、一条天皇時代〔986～〕頃から2百年にわたり、「後拾遺和歌集」〔ごしゅういわかしゅう。20巻。藤原通俊が白河天皇の勅によって、応徳3年〔1086〕撰進した勅撰集〕に洩れたものからえられた。温雅幽寂な歌風の歌が集成されている。

資料 仙台市史第7、8巻

残月台本荒萩（「仙台叢書」第1巻の内）

大日本地名辞書第7巻（吉田東伍）

天保二・三年製作仙台北城絵図〔「宮城県史」第2巻の内、「仙台市史」第9巻附録〕

伊達政宗誕生伝説考（小林清治、「仙台郷土研究」第18巻第4号の内）

## 84 公儀使とは如何なる役職か

問 元禄15年12月15日、目的を遂げた赤穂浪士が泉岳寺に引揚げる途中、伊達家芝邸門前にさしかかった一行に、即製の糲粥〔ほしいがゆ〕を供してねぎらったと聞いています。その処置をとったという大堀亮隆〔おおほりすけたか〕の役職公儀使とはどのようなものですか。

答 徳川体制が確立するに従い、諸藩は、常時幕府当局との連絡を緊密にすることが必要となってきました。そのために各藩は、留守居と称する練熟有能な専任者をそれぞれの江戸邸に置き、外交官的役割を果たさせるようになりました。これは、津の藤堂高虎が慶長18年〔1613〕に、在国中不在となる江戸における公私の便をはかるため、留守居の役を置いたのが始まりで、他の諸侯がこれにならうようになったものです。留守居は、江戸屋敷に常駐し、自藩の幕府に対する公務連絡をつかさどり、兼ねて同列親近諸藩との交際<sup>(1)</sup>に当るのが、各藩とも共通の主たる任務でした。幕府もまた、諸藩に対し通達<sup>(2)</sup>することがあれば、大目付が留守居を招集して行うのが例となりました。伊達家でも、留守居の職務を行う役人を、江戸邸に常置しています。伊達家独特の職名で公儀使〔こうぎつかい〕と称するものです。これは、最初聞番〔ききばん〕といい、後に改称したものです。「藩臣須知」（「宮城県史」第32巻の内）に『他所江対し御役人之名目申様……公儀使ハ留<sup>(3)</sup>